法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<論文><小舎人童>の出現 : 『和泉式部日記』を中心に

大谷, 裕昭 / オオタニ, ヒロアキ

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
45
(開始ページ / Start Page)
13
(終了ページ / End Page)
25
(発行年 / Year)
1992-03-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019639

〈小舎人童〉の出現

――『和泉式部日記』を中心に――

大谷裕昭

一、虚構の語り手

「すべて激しく意志し、それを最短距離的に言動に直結させてしまう」「反平安的な人物」[註1]をはじめて創り出してみせた『大鏡』は、主たる語り手として、一百九十歳の大宅世継を設定する。その語りの場、万寿二年[註2]の菩提講の時より四十年も下っての齢ということになり、後冷泉の死ぬ四年前にあたる。やがて藤原氏を外戚としない後三条の世がくる。「摂関政治史の年齢」[註3]、しかも衆庶の人として、新しい時代の胎動をも受けとめえているそんな年令設定といえよう。昔馴染みの夏山繁樹は、「故太政の大臣貞信公、蔵人の少将と申しし折の小舎人童」であり、貫之の任地和泉国にも従っているが、「染殿の后の宮の洗し」を妻としている世継も、やはり〈小舎人童〉として、貴人の走り使いなどで身を立てていたのであろうか。単なる「卑賤の者」というだけでなく、その身を〈小舎人童〉と設定したのは、粗雑とも言えるほど単純明解な論理や人物評、〈こころ魂〉の高く激しい人物像を語る最適の階層と見なしたからではないか。

三月巳の日の祓の後の逍遙のとき、帥殿一行の平張の近くを慮る道長に対し、「何事のたまふ殿にかあらむ。斯くきうしたまへれば、この殿は不運にはおはするぞかし。災ひや、災ひや」と道長の本音に即してとは言え、思うことをそのまま口にし、「いたく御車牛を打ちて、いま少し平張の許近くこそ、仕うまつり寄せ」た御車副。

高陽院殿での競馬の日、勝敗の鼓の係であった讃岐前司明理が、「勝つべき方の鼓を悪しう打ち下げて、負けに」なってしまう。すると負けにされてしまった随身は腹を立て、馬上のまま明理の方を「見返」り面と向かって「あな災ひや。かばかりの事をだに、し損ひたまふよ。斯かれば、『明理・行成』と一双に言はれたまひしかども、一の大納言にて、いとやむごとな

くてさぶらはせたまふに、腐りたる讃岐前司古受領の、鼓打ち損ひて、立ちたうびたるぞかし」と悪態をつく。

下人の〈こころ魂〉は、すでに『小右記』が書きとめている。

瀧口安倍為方途中會左衛門権佐為義、〃〃咎不下馬之由、欲弾弓箭、為方称瀧口、仍只切狩衣袖、為方偏思恥辱、自切髪投入母宅、忽走到東山寺剃頭云々、件為方故忠並朝臣孫、瀧口内舎人為良子也（寛弘五年七月十二日）

路上での礼を欠いたとして、弓箭をしかけられ、かろうじて、狩衣の袖を切られただけで済む。しかし、出家してしまう。その瀧口、今は亡きあの忠並朝臣の孫（当の相手為義と同身分との思いもあったろうか）、瀧口内舎人為良の子、その安倍為方出家との突然の報らせに、実資は驚きとともに、そのいささつの意外さに心ゆさぶられるものがあったようだ。宮廷社会での争論争闘恥辱に耐えつつ栄達に生き、正二位、権大納言兼右大将の五十二歳の今、あたら若い勇武の人の〈心の高さ〉に目を開くものがあったろう。「欲レ弾ニ弓箭ヲ」から「只切ニ狩衣袖ヲ」への落着、普通ならそれで納まるはずとの思いが「只」にはこめられていよう。しかるに「偏思ニ恥辱ヲ」――出家を思うにいたるまでの為方の心中を実資は共感をもって深く受けとめようとしている。「自切レ髪投ニ入母宅ニ忽走ニ」と、その潔さにおいて活写されてもいる。早まったことをとの分別は実資の筆に微塵もない。むしろ憧れにも近い感情移入の簡潔さをもって、その心の一途さ・美しさが書きとめられている。(註4)

だが、〈こころ魂〉にものを言わせ、おのれのこととして下人の心の高さを誇示してみせたのは、『大鏡』の虚構の語り手〈小舎人童〉がはじめてであろう。「古老による本来の昔物語の姿と、口と耳による物語の面白さとを回復する試み」(註5)でもあった『大鏡』が、主要な語り手として設定したと思われるその〈小舎人童〉とは、どのような階層の男として貴族社会の人々にイメージされていたのであろうか。

二、樋洗しとの語らい

貴族とは異なる世界の男としてはじめて〈小舎人童〉を作品世界に登場させ活写してみせたのは『和泉式部日記』の作者のようだ。かつては弾正宮為尊親王、今は弟宮の文使いとして、和泉の邸にも馴れ親しみ、いつのころからか樋洗童といい仲になっていた小舎人童、その二人の姿を作者は次のように垣間見させている。

女をめぐる複数の男の噂が、「源少将」「治部卿」と実名まで挙げ、おそらくは侍従の乳母あたりからか政略的意図をこめて流され、思わくどおり宮は「いとあはあはしうおぼされて、久しう御文もなし。」という事態となり、その次に、「小舎人童来たり。樋洗童例も語らへば、ものなど言ひて、『御文やある』と言へば、『さもあらず。一夜おはしましたりしに、御門に車のありしを御覧じて、御消息もなきにこそはあめれ。人おはしまし通ふやうにこそ聞こしめしげなれ』など言ひて去ぬ。」と

書かれる。女の心を視点としつつも、あとから樋洗童に聞いた情報をもとに、小舎人童と樋洗童との会話を書く、そういう文章としてつくられている。

「小舎人童来たり」には、宮からの消息への女の期待の心がはりついている。いつもならすぐ伝言なり文なりが伝えられる、声は聞こえているのに今日はおそい。そういう待ちこがれる心を抑え納得させているのが「樋洗童例も語らへば、ものなど言ひて」じっと耳をすまし、しかし次第に不安にもなってき、「言ひて去ぬ」で、宮からは何の消息もなかったのだと落胆させられ、樋洗童から伝えられた小舎童の思いもかけぬことばに女は胸を突き上げられる。ここはそういう女の心を視点としての文章になっているため、女にとっての主たる関心事の蔭で、小舎人童の主たる関心事が従であるかのように扱われているが、小舎人童にとっては、樋洗童との「語らひ」こそが来訪の主目的であり、宮のことは、樋洗童に聞かれたから言っただけの、いわば従でしかあるまい。気のきくこの男のことであるから、宮の意向を受けて、男関係の噂を探りにきたのかもしれないが。女にとっては従でしかない小舎人童と樋洗童との「例も語ら」う仲が、ほかならぬ宮と女との忍びの恋の最大の危機的状況の中で語られているのは示唆的であろう。地面を歩いたり走ったりしていつでもどこへでも自由に動きまわり、じかに「男」と「女」とが語り合える、そんな階層の恋にはじめて関心を示し、自分たち貴族の思うにまかせぬありようとの違いを際立たせて見せた。

三、下人の世界

そもそも和泉の心を、帥宮に自然に向けさせる仲立ちとなったのがこの小舎人童であり、破綻寸前の二人の忍ぶ恋を回復させ離れがたくさせる、その結びつけの役割をもする。宮邸と女のいる石山寺との間を、残暑きびしい八月、「苦しくとも行け」との宮の命により、二往復もさせられ、宮と女とは深いつながりを得る、二人のために、どんなに肉体を酷使し尽くしてくれたか、二人の仲にとってどれほど小舎人童が大切であり、欠くことのできない人物であるかを、『和泉式部日記』の作者は的確なことばで書きとめている。

『蜻蛉日記』でも、例えば、十二月の雪に降りこめられた横川の兼家と作者邸とを往復したり、あるいは、都の中とはいえ二往復もさせられ、けっこう「文使い」は活躍しているのに、その姿はどうやら作者の眼中になかったようだ。それがむしろ貴族の通常の感性なのであり、和泉式部の場合、小舎人童がいかに心に深く刻みつけられていたかのあかしでもあろう。『和泉式部日記』が他者の筆になったとしたら、文使いにしかすぎぬ小舎人童の存在など影もとどめなかったであろうと思う。これほど懐かしく、ひた走りに走ってくれた人物として、しかし、自分たち貴族とは異なる世界の住人として、羨ましいほど地面の上でじかに愛のことばを交わし合える、そういうひとして、和泉式部は小舎人童の姿をしっかり書きとどめた。自分

たち貴族の手足のごとき存在でしかない下人、しかし、その下人にもそれ自身の世界はあり、暮らし方があることを和泉式部ははっきり認識してもいたようだ。

「手枕の袖」のあと、「……月のいみじう明かくすみて、ここにもかしこにもながめ明かして、つとめて、」「霜のいと白き」に歌興をもよおされ、消息をする。宮も小舎人童に文使いをと思う。しかしまだ出勤していない。そのうち女の消息が届き、「ねたう先ぜられぬる」とくやしがる。みやびのかわし合いのゲームの敗けに心底から残念がり、やがて参上した小舎人童に怒りをぶつける。散々な目にあった小舎人童は、女に状況を説明し訴える。とりなす女と宮との歌合戦がいっそう二人の心を深く結びつけていく。二人のいいカモにされた小舎人童の気の毒な姿を、頬笑みつつ和泉は書きとめる。その日にかぎって遅く、小舎人童が出勤してきたというのではあるまい。宮と女とが互の歌をつくる時間が早すぎ、おそらくは女の邸内に住んでいたであろう樋洗童がいつでも文使いとなれるのに対し、小舎人童は自分の家を持ち宮邸に通ってきていたということであろう。小舎人童としては、「いみじうさいな」まれねばならぬ失態などしてはいない。「まだこれより聞こえさせたまはざりけるさきに召しけるを、今まで参らずとてさいなむ」との訴えがもの語っているとおり、御主人どおしの恋のゲームの競い合いに間に合わなかったというだけの宮の勝手な都合で理不尽な目にあい、しかもひとことの言い返しもならぬ思いが女に訴えられる。それのわかる女、それぐらいのきずなはあり、和泉の小舎人童を描く目は暖かい。

貴族の恋のもどかしさじれったさ不自由さ窮屈さを嘆きつくしている和泉はまた、自分ひとりでは日常の何ひとつできないことも知りつくしている。女房たちに支えられはじめて生きていられることを和泉は認識している。「九月二十日あまりばかりの有明の月に御目さまして、」宮がやってくる。女も寝ずにものを思っていた。門をたたく音。「前なる人」を起こすが「とみにも起きず。からうじて起こしても、ここかしこのものにあたり騒ぐほどに、たたきやみぬ。」　忍んでの折角の宮の来訪も、自分ひとりでは応待もできない。女房たち、さらには下男などが動いてくれなくては、見す見す帰すことになる、自分の手足ではない、自分とは異なるひととして立ちはだかる姿を和泉は書きとめもする。下男のことばを活写してみせもする。「人もなかりけり。そら耳をこそ聞きおはさうじて。夜のほどろにまどはかさるる。さはがしの殿のおもとたちや。」[註6]

四、稲荷祭の行事

ところで「稲荷祭」見物にも出かけている和泉は、[註7] 小舎人童がどのあたりに住みどのように生きているかその一端は知っていたかもしれない。和泉より半世紀ほど後だが、藤原明衡『雲州往来』巻上（十九、往状）に次のような文章が見られる。「稲荷祭」を「密々欲ニ見物一セント如何」と誘われ同車し、「至ニ

七条大路ニ内外蔵人町村相挑之間。濫吹殊甚頭中将小舎人童行事。」

「小舎人童は、小さくて、髪いとうるはしきが、裾さはらかに、すこし色なるが、声をかしうて、かしこまりてものなど言ひたるぞ、ららうじき。」などといった貴族女性の審美眼(註8)をはるかに越えた、小舎人童本来の世界で、主役として、「稲荷祭」の世話人として登場してくる。「藤亜将」「源拾遺」と忍びの車で見物に出かけた「散位」の男の目で、祭の様子をはじめてとらえてみせてくれた。

体力で威圧し、「鋒」争いする者どもには「瞋レ目相叱」い「彼輩人馬倶僻易」させ、「其力不レ敵」と明衡をして感嘆せしめた「清太」たち、それらアウトローとしての京童(註9)のエネルギーを統率しているのが「頭中将小舎人童」「馬長戈」の曲乗り――「或策浮雲不レ執レ轡或御遺風不レ顧レ身駞騁之蹄何南何北」にしても、「浮雲」「遺風」というのは、汗血馬・千里馬の類であろうし、それら入手困難な駿馬を自在にあやつっての秀抜な武技の披露といってよかろう。アウトローたちの鍛えあげ磨きぬかれた暴力の腕前が「甚以非常也」と貴族の目を驚かせうならせている。その祭りに費す財についても「鏤金銀餝衣裳剪錦繡綴領袖誠推一身之弊殆及十家之産甚無益事也」と、「無益」のために傾注するエネルギーとして、その絢爛豪華さを書きとめ、「散楽之態」の性的エネルギーの高笑のさまで閉じる。

「甚無益事也」と「散位」をして不思議の感に打たしめた莫大な財費消のエネルギー、それこそが祭なのだったと、祭り果ての後、「件見物有両方之益第一拝神事之威儀其次養閑適之心情而已」と、「無益」の「益」として、その「神事之威儀」をあらためて感動をもって受けとめている。「密々」の、それもことわるわけにもいかぬ、「愁」に気も進まぬながらの見物、それが、暴力的カオスの熱気とそれを統御してみせる暴力的凛乎とした気迫に目を見はるうち、その稲荷祭の見せ物の高度な武術と豪勢な美に圧せられていき、ついには散楽の「仮成夫婦之躰学衰翁為レ夫、模妊女為レ婦始発艶言後及交接」態に「都人士女之見物莫レ不解レ頤断レ腸」そのあらわなかまけわざに、男も女も頤が外れるほど口をあけ腹をかかえ捻って笑いころげる、そのさまを明衡は、「解頤」「断腸」という成語で写し取る。故事の「断腸」の重々しさを「軽ゝ」の笑いにはじめて用いる。疲弊し観念化した「断腸」を「解頤」と共に使い、真反対の意味に転ずることで、身体表現として復権させてみせる。明衡のこういう言語意識の自在さこそが、下人世界を曇りなくとらえさせ、〈男のかなぶみ〉ともいうべき説話文学（『大鏡』の個々の説話をも含め）の文章の土壌のひとつともなっていったと言えまいか。

稲荷祭や祇園祭に費やされる莫大な財といえば、明衡は、その財を目的として生きる「商人」をも形象化してみせている。受領のように農民の膏血を吸い上げての蓄財ではない。才覚と勇気で利潤を上げていく。『新猿楽記』の「八郎真人」がそれである。

猿楽の諸芸を列挙し、その名人たちの業をも並べたて、最後に、見物衆の熱狂と、果ての後の朝の醜態が語られ、それをまた嘲り笑う人も数知らずと記され、それら見物人のひとり、西京に住む右衛門尉の一家に筆が及び、この『新猿楽記』の主眼たる妻三人、娘十六人、男九人それぞれの行状、職業、才能などが語り出されていく。猿楽見物の人々が「新猿楽」として見物されるはめになる。

その最後から二人目に、「八郎」が顔を見せる。「八郎真人商人主領也」と紹介され、その利益を求めてのあくなきあくどさが、「重レ利不レ知ニ妻子一。念レ身不レ顧ニ他人一。持レ一成レ萬、搏レ壌成レ金。以レ言誑ニ惑他心一、以レ謀抜ニ人目一一物也。」と表現される。対句仕立ての漢文が、その貪欲非情ないわば非人間的ありようを、あたかも出家者が妻子を「離去」り[註10]、悉くを捨てひたすら身を修し難行苦行するかのようなあやしくも、筋のとおったひたすらなる思いに生きる人物につくり上げてしまう。その利潤追求のあこぎなエネルギーは、「東臻ニ干浮囚之地一、西渡ニ於貴賀之嶋一。交易之物、賣買之種、不レ可ニ称数一。」と、その交易の範囲の広大さでまず人をおどろかせ、次いでその扱う品々を「唐物」と「本朝物」とに分け、「唐物沈・麝香……本朝物、金・銀……」と、その高貴・高価・豪華・珍奇、とにかく王侯貴族のほしがるものばかり、見物衆には高根の花の数々の〈物〉を列挙することで、商人八郎が大きく力づよく現出してくる。

その世界を股にかけての豪勢な姿を受けて、最後の文章が語られる。

蓋於ニ泊浦一、送ニ年月一、無ニ定宿一。於ニ村邑一過ニ日夜一、無ニ留所一。財宝貯ニ於波濤之上一、浮沈任ニ於風前一、運命交ニ於街衢之間一、死生懸ニ於路頭一。噫、賓客之清談、甚繁、妻子之対面已稀焉。

定住を拒否し、〈旅〉に生きつづけるなかで、人の盛衰、生き死にのすべてを見てしまった人の、まるで無一物の世捨て人のような澄んだ目が見えてくるようだ。かな文ではおそらくよどみをにじませたであろう商人の主領の心が、藤原明衡の漢文によって、筋をとおして生きた男のどでかく、澄んだ崇高な姿としてつくり出されていった。

「小舎人童」は、頭中将に仕え貴公子の手足となることを、下京世界での権威としていたのであろうが、「商人主領」は、誰の配下にもなく、果てしない海や村々・街々すべての世界での働きそのものにおいて権威となっている。宮廷貴族社会に従属しつつそれ自身の世界を有している下人と、すべてから自由に大きく振舞っている下人とを、明衡ははっきり識別していたのであろう。後年大江匡房は、「党」としての「傀儡子」に好奇のまなざしをそそぐが、明衡は、人物像としてはじめて下人を典型化してみせた。

五、恋物語の主役

不遇の文人貴族明衡――「伝統にあきたらず世に拗ねた『不

落居人』[註11]」の見つめていた下人世界、その一端としての貴族社会に従属する下人たちは、ほぼ同時代の貴族女性によっても取り上げられ、恋物語に仕立てられるようになっていた。「頭中将の御小舎人童」と「童べ」との出会いがしらの歌のかけあいで冒頭をにぎわす短篇「ほどほどの懸想」がそれである。

祭のころは、なべて今めかしう見ゆるにやあらむ、あやしき小家の半蔀も、葵などかざして、心ちよげなり。童べの、袙、袴清げにて、さまざまの物忌ども付け、化粧して、われも劣らじと挑みたるけしきどもにて、行きちがふはをかしく見ゆるを、ましてそのきはの小舎人、随身などは、ことに思ひとがむるも、ことわりなり。とりどり思ひ分けつゝ、物言ひたはぶるゝも、何ばかり、はかばかしきことならじかしと、あまた見ゆる中に

主人公の恋物語をでも誘い出すかのように、ひと京はなやぎ浮き立っている祭の季節から筆はおこされ、「童べ」の姿とそれに目をつけ恋をしかけていく「小舎人、随身」のさまがうつしとられ、それらあまたの中から、ひときわ美しい女の童に焦点が絞られていく。「いづくのにかあらむ、薄色着たる、髪はぎばかりある、かしらつき、やうだい、なにも、いとをかしげなるを」と、その宮仕え先の女主人までゆかしく思われるほど、その女の子の様子は人目をひき、「頭中将の御小舎人童、思ふさまなりとて」その場で即座に挑んでいく。

路の傍らの「いみじくなりたる梅の枝」を折り取り、それに、かざしにでもしていただであろう「葵をかざして」突き出し、「梅が枝に深くぞたのむおしなべてかざす葵のねも見てしがな」と歌いかける。「恋の成就[註12]」を実のよくなっている梅に託し、おそらくは「好（酸）きもの」もそこにこめ、切り除かれている「根」を想像することで、「寝も見てしがな」の願望をひき出し、その直截さをもって女に突き進んでいく。「よろしき女車」に祭見物の場所を譲られ、「よしある扇のつまを折りて」よこした歌の筆跡でそれが源典侍とわかり、「かざしける心ぞあだにおもほゆる八十氏人になべてあふひを」と手ひどい扱いを源氏はしたが、その葵巻での源氏の歌の下句を下に敷いての「おしなべてかざす葵」のようであり、それも、誰彼なしにという意を誰もがするようにへ転じ、しかも誰にも無い「根」を幻視することで、誰とも違う自分の思いの根をひき出し女との情交への鮮烈な欲求を型どろうとしたのかもしれない。「葵」をかざしての歌の贈答で、「根」に言及するなどかつてなかったろうし、「寝」を歌うことも稀、「梅が枝」と「葵」との取り合わせも奇天烈であり[註13]、一首のイメージの仕立て方としては乱暴のようだが、とにかく、その時路上の目につく物に託し、今の自分の願いと欲情とをことばの衣裳にくるみつつ表出していった、そのいささかのためらいもない率直さと、歌の伝統的発想もくそもないがとにかくみやびにはなっているその行為とによって、下人の恋をはじめて型どってみせた。

受ける女の童も、いきなり歌いかけてきたことばのあらわさに恥じたりためらったりはせず、即刻「しめのなかの葵にかかるゆふかづらくれどねながきものと知らなむ」とはねつける。

売りことばに買いことばとばかり、来ても私と寝るのはまだまだずっと先の方ですよと、端的に、しかし返歌の作法どおりに拒否の姿勢をみせる。男の歌が源氏のを踏まえていると見抜き、源典侍の贈歌「はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のしるしのけふを待ちける」の後書き「注連の内には」を第一句にそのまま持ってきて、男の心とのみやびの共鳴をひきおこさせつつ、神聖性の隔てを設けて男心をあおり立て、さらに「木綿かづら」を蔓草の「かづら」に転じ、下句のその「根」の「長さ」のイメージ・声調に、容易には手中におさめえぬ女の心深さと媚態めいたものをしのびこませ誘い水にしている。上句のイメージとは別のそれで下句をつなげていったり、男の歌の「葵の根」を「(葵にかかるゆふ)かづら」の「根」で受けるなど女の歌にもレトリックのきしみは見られる。しかし、縁語掛詞の衣裳の下の、「寝」の攻防の直接性において男も女も生き生きと向かい合っている。

女に歌で打ちかえされると、歌でさらに言い寄ることは放棄し、腕力で従わせようとする。『あな、聞きにくや』とて、笏して走り打ちたれば、『そよ、そのなげきの森の、もどかしければぞかし』など、ほどほどにつけては、かたみに、いたしなど思ふべかめり。その後、常に行き逢ひつつも語らふ。」　互いの打ち合う音も聞こえてきそうな、からだの「痛」みとひとつ思いの「痛」みとして、下人の恋が形づくられる。女は逃げ、ことば遊びで暴力を非難しつつ息をはずませたわむれ合い、いい仲になっていく、そんな地べたを自由に走り歩きまわる下人の男と女の恋の姿がこれほどヴィヴィッドに物語られたのは、この作品がはじめてであろう。和泉式部という貴族の女から垣間見られていた下人どうしの姿が、ここではじめて主役として動き出してきたといってよかろう。

この短篇物語について鈴木一雄氏は、「恋が上の層にのびるにつれて描写が足りず、むしろ尻切れの感まであるのに助けられたかたちで、下の恋ばかり目立つ結果になっているともいえるかと思う」[註14]と作品全体を的確に感じとっておられるが、そういう構成上の問題は、中・上の恋の仲立ちをすることになる下衆の批評的言辞などともかかわっていまいか。しばしば女の童に逢いたいという自分の都合を先に立てて小舎人童は、御主人頭中将を女の童の女主人にと思いめぐらし、つぎに、見もせぬ女への仲介を小舎人童に依頼する若侍のことが、小舎人童の「はかなの御懸想かな」とか女の童の「あやしのことや」など、いぶかしさとしての批評的言辞[註15]をさしはさみつつ語られていき、その若侍が得た返事を見て頭中将は式部卿の宮の姫君に思いを寄せ、小舎人童の都合とも合致し、いわば下衆たちの恋にのせられたかたちで思いを深めていく、それもじかに体をぶつけ合っての下衆の恋の確かさとは真反対の、世の「はかな」さへの思いとひとつ思いとしての上層貴人の恋のたゆたいとして、『いかで言ひつきし』など、思しけるとかや。」と、いやまさる思いにみずからを責めつつひとり悩む典型的心情で結んでいる、その余韻の楽しみとともに、すぐ前の語り手の推量「いかなる心のみだれにかあらむとのみ、常にもよほしたまひ

つつ、歌などよみて、問はせたまふべし。」は、その文使いとして、しばしば女の童に逢うことのできる小舎人童の、思わくどおりに事が成り、走りはずんでいる姿をも浮かばせているようだ。

恋のかわし合いの〈場面〉にはじまり、女の童の仕える故式部卿宮の姫君、それと小舎人童の御主人頭中将とをくっつけようと寝物語に二人の語り合う〈場面〉、つづいて頭中将邸での小舎人童に文使いを頼む若侍、どういう人ともわからぬながらその歌に誰ともわからぬ女房のひとりがたわぶれ心に返歌をしたためる〈場面〉、最後に、頭中将が小舎人童から事情を聞き、故式部卿宮在世中への懐旧の情と世のはかなさへの思いをないまぜての、心乱れと自省の〈場面〉その余韻を残しての結び。第一、第二の〈場面〉は、下人中心に語られていき、第三、第四も下人によって〈場面〉が運ばれていく。主人公ないし主人公的なものを下と上のいずれと見るかで、この作品の読みも微妙にずれてくるだろうが、小舎人童が終始活躍している姿に主役を見るのはひが目であろうか。『いかで言ひつきし』など、思しけるとかや。」といった、一見「尻切れの感」の筆の擱き方にしても、その恋の成就するかもしれず実らないかもわからぬ、成就しても深く気に入るかどうか――もはや生涯仲睦まじく一夫一妻をつらぬくなど物語世界で語られなくなって久しいが、ぎりぎり嘘でない虚構の恋として、見もせぬ人へのひとりいやまさらせている思いの真実性でとめておいた、薫型恋としては、これだけで十分語られており、いかほど趣向を新たにし、書き込んだところで、せいぜい「『堤中納言物語』の中でも古めかしい香がするようである」[註16]と評される「逢坂越えぬ権中納言」の結末部程度ということなのではないだろうか。

六、〈小舎人童〉登場の意味

〈小舎人童〉が主役として貴族たちの筆に上せられ、ついには、虚構の語り手として登場するにいたる、それは、〈摂関政治史〉をほぼ生きつくし、また、末法の世を一年また一年と生き、変りはなく、その結果、「持続する日常に馴れて危機感をゆるめ、絶望の淵から自己を取りもどした人心は逆に一種のはりを失[註17]」う、しかし同時に、目も醒めてきて、藤原能信周辺に擬せられる眼光透徹の『大鏡』作者とか、猥雑雑多な好奇心旺盛の明衡や噂を求めてやまない女房層など、貴族層内部の批評的視点は、逆に下人世界に生き生きした〈はり〉を見いだしていったということであろうか。道長を頂点とする貴族たちを「反平安的な」「こころ魂」の高く激しい人物として造り出していく目は、むしろ下人世界への関心の深さ、説話世界への好奇の飽くことのなさ、下人世界のエネルギーをまともに受けとめえた言語意識の自由闊達さが養ってきたとも言えないだろうか。

そういう下人への関心の方向は、ほぼ半世紀ほど以前、和泉式部が、宮の文使い小舎人童のうえにほの見ていたもののようだ。世の人聞きにさらされている貴族社会の息苦しさ・不自由

さ、ひとりでは何ひとつできない無力さをひとり思い知りつくし、忍ぶ恋の真実、北の方退去の真相を訴えての日記執筆において、和泉は、下人のひととして生きている姿を発見していったのであろう。

『大鏡』の本文は新潮日本古典集成本。『和泉式部日記』『源氏物語』『堤中納言物語』は小学館古典文学全集本。『枕草子』は石田穣二訳注角川文庫本。『小右記』は、大日本古記録本。『雲州往来』は、三保忠夫・三保サト子編著『雲州往来享禄本研究と総索引　本文・研究篇』の本文。『新猿楽記』は、東洋文庫本。『日本往生極楽記』『大日本国法華経験記』は岩波思想大系本。

(註1)　渡辺実『平安朝文章史』

(註2)　石川徹氏は『大鏡』(新潮古典集成)解説や「『大鏡』の虚構と史実」(『国語と国文学』一九九一年二月)で、雲林院菩提講開催の年時を「一百九十歳」の額面どおり、康保八年(一〇六五)とされている。

康平八年は、後年の白河即位時ただひとり外戚たりえたはずの高松殿腹藤原能信の没年であり、院政期から振り返っての、われらが生きてきた基盤としての摂関制への作者の思いが籠められている年でもあったろう。しかし、その作者の感慨と語り手世継とは、「一百九十歳」という年令を接点としつつも、雲林院菩提講の語りの場においては切り離して考えておいた方がよいのではないか。万寿三年没の「皇太后宮」(研子)を、世継のみならずその場でじっと耳をすませていた書き手も(石川氏は「侍」と解釈されているが)、現存の人として扱っており、ボケ老人云々で片をつけるわけにもいくまい。

(註3)　益田勝実「虚構〈同時代史〉の語り手――『大鏡』作者のおもかげ――」(『国文学――解釈と教材の研究――』一九六六年二月)

(註4)　この事件は『御堂関白記』にも『権記』にも記録されていない。上層貴公子の出家というのでもなければ濫行闘争に及んだわけでもなく、たかが滝口の出家など関心の対象にさえならなかったのであろう。実資知悉の一族だったのではあろうが、有職故実の記録を主とする変体漢文日記の取り上げる事柄でなく、逆に言えば、実資の目の旺盛なきらめき選り分けと心情が読みとれる記事と言えよう。

ところで、この一族の名がここにのみ記録されているのに対し、相手の橘為義は、『小右記』にしばしば顔を見せる。西暦四年一月九日の「蔵人・昇殿・検非違使宣旨」に「雑色橘為義(儀)」(蔵人所の雑色であろう)それから六年後の長保元年十一月二十二日には「左府使為義朝臣」として、実資邸にやってくる。道長の家司としてかなりの切れ者と見え、その後受領としても頭角をあらわ

していく。確実に地歩を築きつつ成り上っていくそういう為義と比べての、故阿倍忠並朝臣一族の末裔の姿への実資の感慨も加わっていたのかも知れない。

（註5）森正人「大鏡における〈物語の場〉と法華経」（『国語と国文学』一九九〇年八月）

（註6）この切り方は、円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記改訂版』の、「言いさしたり、語尾をにごしたりしたところ、下男の不平のつぶやきと見るにもふさわしい。」との行き届いた読みにもとづく本文に従う。

（註7）『和泉式部集』一〇七の詞書「稲荷祭見しに」云々

（註8）下人たちのありようへの清少納言の関心には、もう一方で、特異な感性、例えば、匂いを嗅覚それ自体の美として感じとるという、『枕草子』以外ほとんど見られぬ質の感性と類似の方向性のうかがえる場合もある。梅の香は、袖に薫きしめられた香を媒介とすることではじめて平安朝歌世界にもたらされたし、花橘の香りにしても、「いいしれない遥かなるものへの思慕の結晶体」として、それも「昔の人の袖の香」という虚構の香（益田勝実氏『古事記』）に憧れ心を託して美に型どることができた。しかし、そういうのとは異質な感性、鼻をつく菖蒲や蓬の香りにとどまらず、汗の香やまして牛の鞦の臭いを「をかし」と感じとるにいたっては、「反平安的な」嗅覚の美といってもよかろう。それと通い合う感性で、「牛飼は、大きにて、髪あららかなるが、顔赤みて、かどかどしげなる。」と浮き彫りしてみせる清少納言の目は、悪党的エネルギーへの凝視かとさえ思えてくる。「きよげなるをのこの、双六を日一日打ちて、なほ飽かぬにや、短き燈台に火をともして、いと明うかかげて、敵の、賽を責めこひて、とみにも入れねば、筒を盤の上に立てて待つに、狩衣の領の顔にかかれば、片手して押し入れて、こはからぬ烏帽子ふりやりつつ、『賽いみじく呪ふとも、打ちはづしてむや』と、心もとなげにうちまもりたるこそ、ほこりかに見ゆれ。」など、勝負に夢中の貴人の生動する姿には、『大鏡』の「反平安的な人物」の片鱗さえうかがえはしないだろうか。鬱屈した深層の目や感性でもそれはあったのかもしれない。

（註9）五味文彦「京童の『悪行』」（週刊朝日百科『世界の歴史』四四）

なお、「京童」や博打などが集団としての力をもって貴顕のために働く様子は、すでに『宇津保物語』「藤原君」巻に見られる。上野宮のあて宮略奪計画に加担して次のように「京童」が語っている。「おのがゆかり、西東の、合はせて六百人ばかり、またこの双六のぬしたち、さばかりいますらむ、それら走り集まりて闘はばやいかに」

（註10）陸奥国新田郡小松寺の住僧玄海について、『日本往生極楽記』『大日本国法華経験記』は、「初具(メシテ)妻子(ヲ)暮年(ニレ)離去(リヌ)」と記している。逆に女が、夫や子のことをはじめ

「世路」「悉皆不レ知ラ」ひたすら法華経読誦する姿をも、法華経験記は書きとめてもいる。

(註11) 大曽根章介「藤原明衡論」(『国語と国文学』一九五八年三月)

(註12) 山岸徳平『提中納言物語全注解』

(註13) 「葵」と「橘」との取り合わせという奇抜なのが一例あるが、イメージの混乱などはない。

まつりの日、あるきんだちの、あふひにたちばなをならして、いひたりしいにしへのはなたちばなをたづぬれば

とありしに

けふあふひにもなりにけるかな(『赤染衛門集』一六八)

憧れの「昔の人」に「逢ふ日」との思いをこめての、趣向を凝らしてのみやび。しかも、上句での歌いかけに応じての下句は、「橘の実」が「葵」に生ったという、シュールではあるがたしかなイメージにまとめられている。

(註14) 「『堤中納言物語』覚書」(『堤中納言物語序説』)

(註15) 「はいずみ」の小舎人童にも男性貴族への批評が見られる。のそれも、女の不幸への深い共感において、自ら仕える主人に、「道すがら、をやみなくなむ泣かせたまへる」「あたら御さまを」と、あれほどのお方を嘆き悲しませてよいものかとの口吻で告げる。後期物語の主人公や「すき者」の多くが、かつてのような語り手の心からの共感に支えられていたのとは異なる姿を見せていることともかかわろうか。

概して、短篇でしか書きえないモチーフ・趣向の発掘と表現の結集である『堤中納言物語』の諸篇には、時代の息吹きがうかがえる。荒唐無稽を承知で例えば、貴人の忍び歩きの供としてすでにお馴染みになっている小舎人童も登場する「はなだの女御」や消息文を中心とする「よしなしごと」などは、当時の語る芸とでもいった遊びの世界の存在を空想させてはくれまいか。「よしなしごと」の向こうに、猿楽の一種の語る芸—乞食坊主めかしての物乞いの物尽しを聞こうとするのはひが耳だろうか。『新猿楽記』が、物尽くしを中心にそれぞれの人物なり職業なりを書いているのと類似趣向の、時代の芸吸収の一表現と見るのはどうだろうか。

一方、女房たちの「あまたたはぶれ乱れ」ての物尽し歌尽くしの遊び世界を、一編の物語に仕上げてみせたのが「はなだの女御」——十数人の娘たちの素姓をかくして「殿ばら、宮ばら、女御たちの御許にひとりづつ」宮仕えに出すという、宮廷・上層世界への関心・憧れとはまた異なる、なにやら陰謀めいた政治くささえ感じさせる舞台設定をした上で、その姉妹たち女房が里に集り語り歌う、それを「すき者」が垣間見聞くという筋に仕立てあげ、「『そのころのこと』と、あまた見ゆる人まねのやうに、かたはらいたけれど、これは聞きしことなれ

ばなむ」と、語りの口調そのままに書きはじめ、語り納め方にも幾種かあるとまで書いてみせている、それが短篇「はなだの女御」と言うのは無理だろうか。すでに『枕草子』のもの尽し、例えば「えせ者の所得るをり」など、のっけに「正月の大根」次いで「行事のをりの、姫大夫」あとは「御即位の御門司。六月、十二月のつごもりの節折の蔵人。……」と次々繰り出されていくなぞなぞ遊びのような〈場〉の、互いに真剣に連想をめぐらし、間髪を入れず後から後から口をついて出、笑いはしやいでいるその場のはずみまでが聞こえてくる、そんな生きて動いていく感性の連想のおもしろさを清少納言は筆にのせていったのではないかと妄想してみたりもするのだが。

(註16) 平井仁子「逢坂越えぬ権中納言」(『国文学――解釈と鑑賞――』一九八一年十一月)

(註17) 益田勝実「院政期文学の世界」(『国文学――解釈と鑑賞――』一九八八年三月)

(一九九一年二月)

(おおたに　ひろあき・文学部講師)